禅房十事　竹篦

画：正親里紗

館　隆志

今回は「禅房十事」の中から、五番目に取り上げられている「竹篦」という道具を紹介します。「しっぺい」と読んでいます。

竹篦は、竹製の棒のことです。中国では日本以上に竹が生えていたでしょうが、両国に同じ原材料があるのはとても便利ですね。三尺（約九〇㎝）の大きさを基本とし、黒漆で塗られることもあります。

住持（住職）が指導の時に用いるものなのですが、激しい指導の際には竹篦で打ち据えることもしばしばありました。看話禅の大成者である大慧宗杲禅師の語録には、竹篦を用いた指導が多々収録されています。また、後の虚堂智愚禅師は大慧禅師の指導を「黒漆竹篦、胡打乱打」と評しています。黒漆の竹篦でめちゃくちゃ打ち据えながら指導していたのです。とても厳しそうです。

ちなみに、中国に留学して虚堂禅師の法を嗣いだ僧侶が、南浦紹明禅師です。その後の法系は南浦紹明（大応国師）―宗峰妙超（大

燈国師）―関山慧玄禅師と続くわけです。

中国の唐の時代を代表する指導方法に、「臨済の喝」「徳山の棒」と呼ばれるものがあります。臨済宗祖の臨済義玄禅師は「喝」と大きな声でどなりつけたのですが、これはもちろん修行僧を導くためです。また、同時代の徳山宣鑑禅師は棒を使った指導を行い、相手構わず二十回も三十回も打ち据えることで知られていました。どちらもとても厳しい指導方法ですね。

『無門関』という公案集の第四十三則に「首山竹篦」という公案が収録されています。首山というのは、首山省念禅師という中国の臨済宗僧侶です。

首山禅師はあるときに竹篦を手にとって修行僧に言いました。「諸君、もしこれを竹篦と呼べば間違いだし、竹篦と呼ばなくても間違いだ。諸君、さあ何と呼ぶのか言ってみたまえ」と。

禅問答ですから解らなくても気にしないで構いません。しかし、竹篦という物の名前を呼んでも間違いで、呼ばなくても間違いでは、どう呼んだらいいでしょうか。

でも考えてみてください、本誌六月号で説明した「蒲団」では、昔の禅宗の「蒲団」は、現在の臨済宗では「単布団」、曹洞宗では「坐蒲」と呼んでいます。そして、「蒲団」が転化して、寝具の「布団」になったのです。言ってしまえば、物の名前なんてよく変わるものなのです。物の本質を看ることこそ求められているのではないでしょうか。

人差し指と中指の二本をそろえ、手首の上部あたりに「ペシ」と一撃、これを「しっぺ」と言います。お返しに相手に「しっぺ」することを「しっぺ」返しと言います。この「しっぺ」のモデルになったのが、「竹篦」なのです。

ところで、この「しっぺ」の話を今の大学生に授業で話してもまったく通じません。なにせ、「しっぺ」を知らないのですから、話

をしても仕方が無いのです。

今の仏教系の大学の授業には、もれなく少し年配の聴講生の方々がおられます。人生の余暇として、はたまた生涯の勉強として、大学に仏教を学びにこられる方がとても多いのです。そのような方々だけが、「へぇ～」と頷いて目を輝かせてくれます。しかし、大学生には何の話をしているのか皆目見当も付かない状態なのです。

現在、臨済宗でも曹洞宗でも「竹篦」はまだ用いられています。もちろん、たとえ指導のためであっても棒で打つという行為は現代社会では問題です。指導の際に手に持つ以外は、寺院の床の間などを飾る道具になっているようです。

また、「警策」（臨済宗ではケイサク、曹洞宗ではキョウサク）と呼ばれる坐禅中に背中や肩を叩く棒が、江戸時代に黄檗宗の影響で登場します。そのため、竹篦はその役割の一部を「警策」に譲ったとも言えるでしょう。

ただし、現在の曹洞宗では、この「竹篦」を必ず使う行事があります。五月号の話で紹介した「首座法戦式（しゅそほっせんしき）」という儀式です。首座という第一座（修行僧のリーダー）になると、その人は住持から「竹篦」を授けられ、自分に与えられた『従容録（しょうようろく）』の公案について、「竹篦」を手に取りつつ、数々の禅僧たちと禅問答するのです。

「禅房十事」の五つ目は竹篦でした。禅寺ではとてもとても厳しい指導が行われるものです。「竹篦」に代表される厳しい修行生活もまた、禅寺の特徴なのかもしれませんね。

舘　隆志（たち　りゅうし）
一九七六年静岡県沼津市生まれ。二〇〇九年駒澤大学大学院博士課程修了、博士（仏教学）。現在花園大学国際禅学研究所研究員。著書に『園城寺公胤の研究』（春秋社）、『蘭渓道隆禅師全集』第一巻（共編、思文閣出版）。